

高知精神保健

発行所 高知市丸の内1丁目2-20
高知県子ども・福祉政策部障害保健支援課内
高知県精神保健福祉協会
電話：088(823)1111・088(823)9669(直)
FAX：088(823)9260
E-mail：kochi-mhwa@mopera.net
発行人 数井 裕光 編集人 諸隈 陽子

第288号

第63回高知県精神保健福祉大会

「いつかの涙を光にかえて～統合失調症の兄との絆：トイピアノによる再生～」

(令和6年10月16日(水) 高知県立県民文化ホール(グリーン)にて開催)

講演 トイピアノコンサート ～おもちゃのピアノが教えてくれたこと～



講師

トイピアニスト

sound office音旅舎代表
畑 奉枝 氏

皆さん、こんにちは。ご挨拶代わりに弾かせていただいたのは「バラの庭」という私自身が作ったオリジナル曲でした。トイピアノはその名のとおり、おもちゃのピアノです。私がトイピアノと出会ったのは16年程前で、それ以前は音楽事務所に所属し、オリジナル曲でアーティストとコラボレーションをしていましたが、その忙しさから一度離れ、これから何をしようかと訪れた骨董市でトイピアノを見つけました。

仕事は辞めたものの自分には音楽しかないと考えていた時期にトイピアノと出会ったので、これはきっと運命なんだと感じ、これからの自分の代表的楽器にしたいと強く思いました。トイピアノはピアノと違ってコトコトと雑音がしたり、鍵盤も鳴ったり鳴らなかったりするのですが、通常のピアノにはない魅力がなんだか人間みたいで、どっぷりとトイピアノの世界にはまりました。

それからはその魅力を知ってほしいと自分の車にトイピアノを積み、自宅のある埼玉からあちこちへ営業に行きましたが、最初のうちは「おもちゃでしょ?」「本物の音楽しかいりませんから」などと言われ、演奏の機会がなかなかもらえませんでした。それでも私はトイピアノで自分だけにできる音楽を創りたいと強く思いながら、「トイピアノの魅力は何ですか」と聞かれたら「不完全なところですよ」と言い切ろうと決めました。

そして気付けば、その不完全な楽器たちと向き合いつつ、もう35台も集めています。今も飽きることはなく、弾けば弾くほど愛しい存在、尊い存在と思えて、幸せな気持ちになります。

ここからはそのおもちゃのピアノ達が奏でるメロディーが、私と家族にとって最も大きな影響を与えてくれたというお話を中心に進めさせていただきたいと思います。営業で実家のある愛媛県にトイピアノを持ち帰り父と話をしていた時に、長い間交流のなかっ



目次

第63回高知県精神保健福祉大会講演(講師:畑 奉枝 氏) … 1
令和6年度ボッチャ大会を開催して … 4

第41回日本森田療法学会 … 5
ご芳志への御礼 … 6

た兄が2階から降りてきました。そしてトイピアノを触りながら「どうしたんや、これ」と聞いてきました。「トイピアノって言うんよ」「へえ〜」「このガラスもきれいやろ」「そやなあ、100万くらいするんか？」兄は冗談としか思えない言葉をボソッと言ったのです。「そんなわけないでしょ」と言い返しながら、私は兄が冗談を言ったのかなとびっくりしました。後で分かったのですが、私は兄に普通の兄妹らしく「兄ちゃん、見て見て」と言って自分の持っている物を見せたり、自分のやっていることを話すようなことはこの何十年もありませんでした。というのも、私の兄は19歳の時に統合失調症と診断され、私にとっては意味不明な言動に不安を抱いたり、両親が見ていないところで兄から殴る蹴るの過酷な暴力を受けていたからです。両親に言っても「兄ちゃんは今、受験で疲れているだけ。誰にも言っちゃダメ。すぐに治るから。」と繰り返すばかりでした。でも兄の症状はどんどんエスカレートし、ついに入院治療することとなりました。何年も前から兄の様子を両親に伝えていたのに聞いてもらえなかった私は、自分こそが被害者だと思っていました。兄の症状にも耐えられず、また、両親のことも許せなかったのです。

そのうちに、私も学校に行けなくなりました。自分も生きることがしんどくなっていたのです。そして心のどこかで、もしかしたら兄もそうなのかもしれない、とも思っていました。そんな私を両親は「妹まで発病したかもしれない」と精神科病院に連れて行きました。何か診断が付けば両親が自分のことを見てくれるのかもしれないという気持ちと、ちょっとした好奇心もあり、通院が始まりました。病院では「どうしたんですか。学校行くのが辛いんですってね。子どもの時はどうでしたか。兄妹はどうですか。」



お父さんお母さんは小さい時どうでしたか。」と何回にも分けて話を聞いてくれ、「辛かったですね」と私の気持ち



に共感してくれました。高校生ながらに「精神科病院って悪くないな」と思いました。それから病院には3か月程通い、留年手前でやっと高校通学を再開し、その後病院に行くことはありませんでしたが、私の中では精神科病院はちゃんとその人の話を聞いてくれるところという印象がずっと残っています。そして大学に進学して以後、実家には戻らず、家族とも距離を置いていました。兄の病気のことを周囲に隠したい気持ちもあったのだと思います。

それなのに自分の行き場がなくなった時に思いついたのが、やっぱり故郷だったんです。その故郷での公演が決まったことを父が喜んでくれ、兄と久しぶりに兄妹らしい会話をしたことにハッとしました。後になって兄は、「兄ちゃんって言われたのは何十年ぶりやろ」と言っていました。そしてその時兄がトイピアノの前にストンと座り、いきなり即興演奏を始めたのです。それはもう驚いたという次元ではないくらいのショックで、体中に稲妻が走ったようでした。単に即興ができるからすごいという事ではなく、音に出るその人そのものの本質には、優しい朗らかで楽しいことが大好きだった子どもの頃の兄が詰まっていたんです。「兄ちゃんがピアノ弾いてるところ、子どもの頃以来見たことなかったのに」という私に「本物のピアノはしんどいや。ちゃんとした姿勢で、ちゃんとした指使いで、ちゃんと楽譜を見ながら、ちゃんと弾かんといかん。強いられているみたいでしんどい。だけどこれはおもちゃのピアノだって言うたやろ。兄ちゃんも統合失調症になって、社会によう出んとずっと家に居って、不完全な存在なんや。だからこのおもちゃのピアノに寄り添えるんや。」その兄の言葉を聞いて

て、私は今まで何十年も兄に対して持っていた思いが溢れ出し「兄ちゃん、ごめん。私、分からなかった。兄ちゃん、しんどかったね」と言うと、「仕方ないんや。」と言ったその兄の言葉は、本当に悲しかったです。誰だって病気になりたい人は居ないし、何で精神疾患だけは人に言うてはいけない病気なのか、色んなことを考えました。それはこの小さなおもちゃのピアノが、ほとんど壊れかけていた私たち家族関係をもう1度考えるきっかけをくれた瞬間でした。

そこから私と兄との音楽の交流が始まりました。褒められれば褒められるほど兄の表情が緩み、1年も経たないうちに兄の曲は800曲を超えました。父も兄の本当にやりたい事、得意な事があるんだと理解してくれ、私たち二人の背中を押してくれるようになりました。

父は父で精神障害者の家族会の活動に熱心になっていきました。私も家族会に呼ばれ、トイピアノの演奏をする機会が増えました。最初は家族会に入るのを嫌がっていた父は80歳を過ぎて家族会の会長になり活動を続けていました。本日表彰された高知県の家族会の横田さんとも交流がありました。考えてみると兄が病気になってなかったら、こんな出会いもなかったなと今は素直に思います。

昔、兄と父は本当に壮絶なケンカも多く、いつか大変なことになるのではないかという不安を抱えていましたが、3年前に父が余命宣告を受けた時、「お父さんの終の棲家である自宅から僕は見送りたい」と兄は言いました。その言葉をきっかけに、訪問医や看護師、ヘルパーさんによる包括支援を依頼し、数ヶ月後。家から父を見送ることが出来ました。その流れで、兄は今も福祉や医療の方の助けをいただきながら、一人暮らしをしていますし、私も周囲の方々にカミングアウトし、困った時には「助けてください」と具体



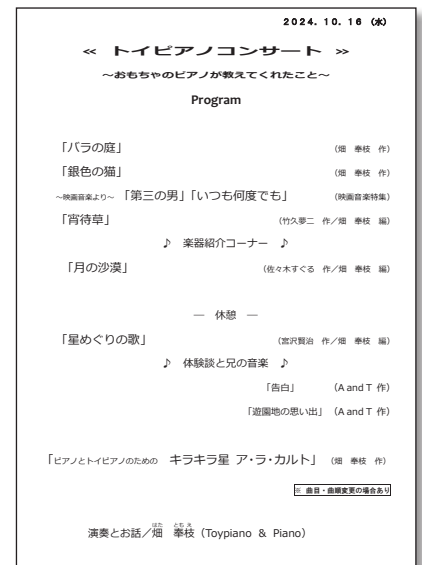
的に伝えるようにしています。

演奏会でもこうした話をする
と「実はうちも…」と声をかけてくださる方も多く、「子どもの病気のことを他人に言えず隠して生きている」というご家族や、「あなたは色んな所

に出てお話するチャンスがあるようだから、世の中に伝えてほしい」と老夫婦に言われた言葉にも背中を押され、社会に向けて発信しようと数年前に、本も書きました。これまでのように家族会の中だけではなく、社会や地域に向けて伝えていくことが、偏見を解消していく一歩だと感じています。時には、分からないことを恐怖と感じたり、関わりたくないという気持ちが働くこともあります。それも理解出来るからこそ、本当に分かってもらうためには公にしていこう必要があると思ったのです。

現在は昔と違って情報も簡単に入手することができますし、病名も精神分裂病から統合失調症へ変わわり、当事者の方々が外に出ていく場や支援者も増えました。でもまだまだ「知りたくないこと」になってしまっている現状もあります。タイムマシンに乗って、未来を見てみたいです。10年後20年後には当たり前のように皆で助け合いながら、理解し合いながら、支え合える社会になってほしいと思います。今日はトイピアノの演奏と一緒に、我が家の体験を皆さんにお聞きいただきました。

「私は精神障害者家族会のゆるキャラです。」そう言いながら！「音楽」という手段を持っていることを活用しながら！これからも活動していきたいと思っています。またお会いできる日を楽しみにしております。ありがとうございました。



令和6年度ボッチャ大会を開催して

藤戸病院デイケアセンターMAC
作業療法士 今城可嗣

デイケア連絡会の会長を務めております、藤戸病院の今城と申します。今年度縁あって2度目の登場機会を得ました。今回は昨年実施した、デイケア連絡会主催のボッチャ大会についてご報告させていただきます。

その前に、以前の記事でも掲載していただきましたが、改めて「デイケア連絡会（以下：連絡会）」という団体についてご紹介させていただきます。

連絡会とは精神障害者のリハビリテーションの向上のために、会員の知識・技術の向上及び精神障害者デイケア施設間の交流・情報交換を図ることを目的とし、高知県下の精神科デイケアを有する施設が定期的に集まり活動をしています（会則より一部抜粋）。現在は14施設が入会しており、2ヵ月に1回会議を開催し、イベントの企画・運営や情報交換会を行っています。

●ボッチャ大会開催にむけて

昨年の5月に約5年ぶりとなるデイケア交流会（以下：交流会）を開催いたしました。この時はボッチャ・卓球・オセロに麻雀など、多岐にわたる種目を取り入れ実施し、その中でもボッチャへの参加者が多く、非常に盛り上がりました。交流会という名目で順位はつけませんでしたが、その後の会議でボッチャ大会として開催したら盛り上がるのではないかな。という意見も挙がり、大会として開催を目指すことになりました。

●浮かび上がる課題…

交流会の反省から浮上した課題…それは圧倒的な審判不足！交流会では、ほぼ同じスタッフに審判を担っていただき、かなりの負担をかけました。ボッチャは競技の特性上、老若男女問わず実施できるメリットがある一方、円滑なゲーム進行や1点を争うせめぎあいを判断する審判の役割は非常に重要です。



というわけで、その課題を解決するべく、県立障害者スポーツセンターの力をお借りして審判講習会を実施しました。各施設により、ローカルルールが存在していることを考慮し、連絡会共通のルールを確認しました。

●ボッチャ大会本番

2024年11月29日（金）本番を迎えました。ボッチャだけの大会は初めての試みため、どの位集まるか心配でしたが、



10施設から総勢130名ほどの人が来てくれました。遠方から来られる施設もあり、予定していた開始時間を過ぎてしまいましたが、利用者やスタッフの協力の元、円滑に大会を進めることができました。

参加チームが多かった為、本来1試合4エンドのところを予選のみ2エンドで行うこととしました。エンド数が少ないことで、一投一投にかなりの緊張感がありましたが、皆さん笑顔で取り組んでいただきました。大会前不安視していた審判も、各施設のスタッフが声を掛け合いながら交代で行っていただき、無理なく実施できたと思います。

●最後に

今回、大会の開催にむけてご協力いただいた各施設の皆様、ならびに審判講習会や会場を貸して頂いた県立障害者スポーツセンターの方々に、この場を借りてお礼申し上げます。コロナ禍の影響もあり、これまで取り組んできた卓球やソフトバレーといったスポーツが衰退傾向にある中、今回の大会を通じてボッチャが新たな選択肢の1つになったのではないかと感じました。

連絡会でも今後も利用者の皆さんが楽しめるような企画やこのような形で情報発信をしていきたいと思いますので、温かく見守っていただければ幸いです。

第41回 日本森田療法学会 森田正馬生誕150周年記念 高知大会

2024年12月7日・8日に高知県立県民文化ホールにて、第41回日本森田療法学会（大会長：高知大学医学部寄附講座児童青年期精神医学 高橋秀俊 特任教授）を開催いたしました。

森田療法は、高知県野市町（現・香南市）出身の精神科医、森田正馬先生によって1919年頃に創始され



森田療法学会 会場正面

た主に神経症（不安症や強迫症等）を対象とする、我が国の最も伝統的な精神療法の一つです。

本学会は、全世界における森田療法の発展や地域住民の健康の向上に貢献することを目的として、年1回開催されております。2024年は、森田正馬先生の生誕150周年にあたり、森田療法のさらなる発展を目指して、「原点から紡ぐ多様な支援 精神療法のレジェンドを継承しライフステージを通して持続可能な多職種地域連携を共創する」をテーマに森田正馬先生の生誕の地である高知県で大会を開催しました。

プログラムでは、会長講演として大会長である高橋秀俊先生が、「ライフステージを通じた発達障害臨床における森田療法的関わり：感じから出発する」を発表し、その中で、森田療法における重要な概念である「症状不問」や、森田正馬先生が論語から引用した「君子和して同ぜず」という考え方と「子どもの心のケア」の繋がりを発表しました。

シンポジウムとしては、「日本独自の精神療法の現代的意義と発展性」をテーマに、我が国独自の精神療法や治療手法である森田療法と内観療法、生活臨床のそれぞれの立場から中村敬先生（東京慈恵会医科

大学森田療法センター）、堀井茂男先生（公共財団法人慈恵会慈恵病院）、井上新平先生（社会医療法人北斗会さわ病院）にお話しいただき、それぞれの独自性や共通性、今後の展望を議論いただきました。

特別講演としては、森田正馬先生のひととなりや足跡を知るため、生家保存の観点から、上村直人先生（高知大学保健管理センター医学部分室）、池本耕三氏（森田正馬生家保存会）にご発表いただきました。

受賞講演として、池田數好の森田療法理論を、「シン・第二世代の森田療法家、池田數好を〈読む〉」と題して、黒木俊秀先生（中村学園大学教育学部）にご講演いただきました。

特別企画としては、森田療法の自助グループである「生活の発見会」と医療現場との連携のために、「医療現場と発見会の新たなつながりをめざして」というタイトルで、司会に館野歩先生（東京慈恵会医科大学精神医学講座）をお招きし、発見会のメンバーを中心に活発な議論を行いました。

本学会の特徴である、一症例をじっくりと検討する研修症例セッションでは、半田航平先生（東京慈恵会医科大学附属第三病院精神神経科）に「視線恐怖に対して外来森田療法を行っている一例」を提示していただき、新村秀人先生（大正大学臨床心理学部）に論じていただきました。

これ以外にも、児童青年期や、産業保健の視点からみた森田療法に関する教育講演や災害や紛争に関する国際的なテーマを取り上げた International Symposium を開催することができました。



森田正馬生家模型

また、本学会が重要視している一般演題は70題以上の演題が北海道から沖縄まで全国から応募があり、中国やカナダ、フィンランド等海外からの応募もありました。様々な観点から興味深い発表をしていただきました。

開催にあたっては森田正馬先生、生誕の地での開催のため日本森田療法学会の全面的なバックアップのもと、高知医学研究・教育支援機構の共催、高知県医師会、高知県臨床心理士会、高知県、高知県教育委員会、香南市、香南市教育委員会の後援を得て、高知大学医学部神経精神科学講座の関連病院や同門の先生方をはじめ、県内の多くの関係者の皆様のご協力を得ることができました。

当日は、県内外から多数の方にお越しいたき、最終的に304名の参加となりました（県外が235名、県内が69名）。これは、森田正馬先生がかつて教授を務めていた東京慈恵会医科大学で開催された、2023年の前回大会を上回る参加者数でした。これだけの参加者に来ていただき、盛会に終われたことは、ひとえに高知大学医学部神経精神科学講座の関連病院や同門の先生方、および関係者のご支援とご協力の賜物であると感じております。この場をお借りして、本大会のご報告と協会の皆様への感謝を申し上げます。

今後も皆様と協力して、森田療法が県



森田療法学会での集合写真

内に普及し、県民のメンタルヘルスが向上するように、高知大学医学部神経精神科学講座一同、森田正馬先生の説く「努力即幸福」の心意気で尽力していきたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

文責 高知大学医学部神経精神科学講座
森田 啓史(大会事務局長)

ご芳志への御礼

本年度の協会活動へのご寄付ありがとうございました。

いずみの病院	高知こころクリニック
三宮心療クリニック	はりまや橋診療所
町田病院	渭南病院
宇賀 茂敏	竹本病院
田野病院	津田クリニック
高知ビル美装(有)	三和水産(株)
三誠産業(株)	四国医療サービス(株)
四国メディカルトリートメントセンター	大伸フーズ(株)
(有)フジムラ	大塚製薬(株)高知出張所
武田薬品工業(株)	中澤氏家薬業(株)
Meiji Seikaファルマ(株)	ヤンセンファーマ(株)
(株)キタムラコンピュータ	(有)伊野清掃
日本化工(株)	(株)ツバメガス
クリニックひろと	(有)サンファーマシー

(敬称略:順不同)



MITSUBISHI
CHEMICAL
GROUP

選択肢をつくる。
希望をつくる。



 田辺三菱製薬

<https://www.mt-pharma.co.jp/>



なんとかしたい。
だから、挑む。

 Sumitomo Pharma